

# 茨木のり子 六月の会 会報 No. 77

第 77 号  
2020 年 6 月 1 日発行

「茨木のり子 六月の会」

代表 黒羽根洋司  
事務局 戸村 雅子  
山形県鶴岡市本町 3-8-48  
tel. 0235-22-7297



羽黒山の石段参道。ミシュランガイド三つ星認定の杉並木に囲まれた石段は2,446段。羽黒山中興の祖50代別当天有が、江戸時代の慶安元年(1648)から13年の歳月をかけて敷設したと言われています。(撮影:成澤孝夫。2020.5.14)

茨木のり子さんの「はたちが敗戦」という文章の中にこんなくだりがあることを戸村雅子さんに教えていただききました。

なにもかもが、しっちゃかめっちゃかの中、学校から動員令がきた。東京、世田谷区にあった海軍療品廠しょうじょうという、海軍のための薬品製造工場への動員だった。「こういう非常時だ、お互い、どこで死んでも仕方がないと思え」という父の言に送られて、夜行で発つべく郷里の駅頭に立ったとき、天空輝くばかりの星空で、とりわけ蠍座さそりざがぎらぎらと見事だった。当時私の唯一の楽しみは星を見ることで、それだけが残されたたった一つの美しいものだった。だからリュックの中にも星座早見表だけは入れることを忘れなかった。(『茨木のり子集 言の葉1』所収)

茨木さんが星空好きだった!? 私

## 茨木のり子さんと 星空・宇宙

山形大学客員教授 柴田 晋平

は学生の頃から現在に至るまで、ずっと茨木さんの大ファンなのですが、仕事は文学とは程遠い宇宙物理学の研究や夜は星空案内です。茨木さんへの思いは生涯片思いで終わりそうでした。しかし、この文章をよんで世界が一変。ちょうど、思いを寄せていた人が、同じように自分のことに興味を持ってってくれていたことを知った青年のように小躍りしてしまいました。

茨木さんはどういった思いで星空を見ていたのだろうと考えてみました。星がもつともたくさん登場する作品は「夏の星に」だと思います。

まばゆいばかり豪華にばらまかれふるほどに、星々あれは蠍座の赤く怒る首星アンタレス、永久にそれを追わねばならない射手座の弓、印度人という名の星はどれだろう、天の川を悠々と飛ぶ白鳥、しっぽにデネブを光らせて、頸の長い大きなスワンよ! アンドロメダはまだいましめを解かれぬままだし